

保育者の資質向上を目指して —身体表現遊びからみえるもの—

小原 幹代* 本山 益子**

要 旨

筆者らは、保育者の育ちを視点とした過去の研究において、身体表現遊びが、保育者としての専門的な資質・能力を育む可能性があることを検証してきた。そこで、本研究では、2 年目、3 年目の保育者が身体表現遊びの積み重ねにより、保育者の環境構成や援助につながる専門的な資質・能力を身に付けていった過程を身体表現遊びの保育実践における環境構成や援助を検討することで探ることを試みた。その結果、子どもの興味・関心を捉えて環境構成や種まきを行い、身体表現遊びにおいて主体的・対話的保育を実施していた。その実践の中に、子どもの思いや表現を受け止め、子どもの創造力や工夫を引き出そうとする保育者の意図による援助を確認することができた。また、その過程において、観察力や対話力、子どもの表現を認める感性などの専門的な能力も培っている様子を把握することができた。

キーワード: 身体表現遊び、資質・能力、環境構成、対話的保育

I. はじめに

幼稚園教育要領改訂や保育所保育指針の改定に伴い、主体的・対話的保育や環境を通して行う教育が示され、保育者として、この保育を行うための実践力を身に付けることが重要になってきている。筆者らは、保育者の育ちを視点とした過去の研究¹⁾において、身体表現遊びが保育者としての専門的な資質・能力を育む可能性があることを検証してきた。

そこで、保育者にとっての専門的資質・能力について『幼稚園教育要領』より確認したい。「環境を通して行われる教育」や「遊びを通して行う教育」において保育者に必要とされる資質・能力とはどんな力であるのか、平成 29 (2017) 年改訂「幼稚園教育要領解説」⁽¹⁾には、いくつかの保育者の役割が示されている。

まず、「環境を通して教育を行うためには、幼児が興味や関心をもって関わるができる環境条件を整えることが重要であるが、それだけでは十分ではない。幼児が環境にかかわることにより、その発達に必要な経験をし、望ましい発達を実現していくようになることが必要である。」²⁾とあり、また、「教師は幼児の活動の流れに即して、幼児が実現したいこ

とを捉え、幼児の思いやイメージを生かしながら環境を構成していくことが大切である。」³⁾との記述もある。つまり、幼児の興味・関心から環境を整える構成力が重要であると言えるであろう。

また、援助についても「幼児の活動は、教師の適切な援助の下で、幼児が環境と関わることを通して生み出され、展開されるものである。教師は幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して発達に必要な経験が得られるよう、援助することが重要である。」⁴⁾とあり、環境構成のみならず、それによりもたらされる幼児が生み出す遊びの展開には、援助が重要な役割を果たすことが述べられている。

そして、「教師は、幼児と活動を共にしながら、一人一人の幼児が心と体をどのように動かしているのかを感じ取り、それぞれの活動が幼児の発達にとってどのような意味をもつのかを考えつつ、指導を行うことが大切である。」⁵⁾との記述もあり、幼児の内面を感じ取り、理解した上での援助が重要であることが示唆されている。

また、「幼稚園教育要領解説」⁽²⁾には、教師(保育者)の役割として、5つの観点について述べられている。

一つめは、子どもが行っている活動の理解者であ

*岡崎女子短期大学 **京都文教大学

る。子どもの表現が何を意味しているのか、何を背景として表現されているのかを、身体表現遊びの場では、瞬間的に感じて理解しようとする保育者の意思が働く。これは日常の遊びにおいても積み重ねることにより、自ずと保育者の感性を磨いていくのではないかと推測する。

二つめは、子どもとの共同作業である。子どもと一緒に遊び、共鳴するものとしての役割が大切であると述べられている。この「共鳴」は身体を通しての「共創」でもあり、身体や言葉を通してのキャッチボール、つまり対話であると推察できる。

三つめは、子どもが憧れを形成するモデルとしての役割である。身体表現遊びでは、身体を通しての様々な表現や工夫が伝播していく。保育者の感性で捉えた身体の表現を見て、子どもは模倣し、さらに独自に工夫しようとする姿が見られる。これは子どもを刺激する環境として捉えることができ、その役割が大きいと思われる。

四つめは、遊びの援助者である。身体表現遊びは、その題材に興味や関心を持ち、より深く知るための環境構成が遊びにとっての種まきであり、環境構成として不可欠である。或いは、子どもが、よりその世界に入り込み、なりきって表現するためには物や音を使った環境構成や援助が有効であり、常に子どもと対話しながら援助していくことが必要であると推察する。

そして、五つめは、子どもが精神的に安定するための心のよりどころとなることが述べられている。身体表現遊びは、保育者と子どもの関係性が、指導し、指導される関係性ではない。保育者も子どもと一緒に遊びの世界を感じながら、その場において子どもの表現を受け止めていくことで、自ずと安心感が生まれる。保育者が同じ視線で感じ、考えることで子どもは受け止めてもらえると安心し、目の前にいる保育者を安心の基盤として、自らの表現を発信していくことができると推測する。

身体表現遊びは、子どもの興味・関心から様々な方法を用いて、じっくりと子どもの心の中に興味を呼び起こしていく「種まき」と言われる保育者の環境づくりがなされて遊びが展開されていく。また、保育者が持つ感性で瞬間的な子どもの反応や表現を捉えることで、瞬時に子どものより良い経験へとつなげる援助が必要とされる。

以上のような理由から身体表現遊びを保育者が実践することで、保育者の資質・能力を培うことにつ

ながっていく可能性が大きいと予想することができる。保育者が身体表現遊びを積み重ねることにより、子どもの表現を捉える感性や観察力、また、子どもの思いを受け止めイメージや創造力を引き出していく対話力や表現力などを身に付けていく過程を「主体的・対話的保育」をテーマとした過去の研究⁶⁾でも確認することができた。

そこで、本研究では、2年目、3年目の保育者が身体表現遊びの積み重ねにより、保育者の環境構成や援助につながる専門的な資質・能力をどのようにして身に付けていったのかを、クラスの友達と「みんなと一緒にする」身体表現遊びの保育実践を検討することで明らかにする。

II. 研究方法

1. 対象

私立こども園 経験年数2年目の保育者1名(B)
私立幼稚園 経験年数3年目の保育者2名(A・C)

2. 期間

2022年6月～2023年3月

3. 方法

(1)各保育者が一年間に2回の保育実践を行う。

クラスのみなどと一緒に身体表現遊びを行った保育実践を映像に収録する。

(2)保育実践後に保育者への以下のインタビューを実施し、記録にまとめる。

〔質問項目〕

- ・本日の保育でねらいとしたことは何か。
- ・子どもの表現のどこを認めようと思ったか。
- ・環境構成や種まきで行ったことはどんなことか。
- ・身体表現遊びではどんなことを引き出そうと意識したのか。
- ・次回、行いたい環境づくりや実践内容・配慮点は何か。

(3)各保育者について(1)(2)を資料として、①実践につながる環境構成、②実践における援助の2つの観点で検討する。

4. 倫理的配慮

対象者に対しては、研究の趣旨、個人情報取り扱い等について説明し、同意を得られた場合に同意

書に記入を求めた上で、研究保育の VTR 収録、インタビューを実施した。令和 4 年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会の承認を得て行った。(通知番号 0400221)


Ⅲ. 結果及び考察

3 名の保育者が、それぞれ一年間に 2 回身体表現遊びを行った。身体表現遊びのテーマ・対象児年齢・実践日・保育の内容と、インタビュー記録の抜粋を、それぞれ表 1～表 12 に示した。

1. 保育者 A (3 年目) の身体表現遊びの保育実践

1 回目：「マグロ」(5 歳児) 9 月 25 日
2 回目：劇遊び「ノラネコ軍団のおすし屋さん」 2 月 8 日

表 1. 1 回目の「マグロ」の保育実践



子どもの活動と姿	保育者の援助・配慮
<p>○保育者が作った「マグロの一生」の絵本を見る。</p> <p>・列になり、波を表現する</p> <p>・マグロの筋肉の話の場面では、筋肉を見せるポーズをいろいろとやって見せる。</p> <p>○マグロの卵になる</p> <p>・卵が海の中で揺れている。</p> <p>・マグロの赤ちゃんが泳ぐ。</p> <p>・マグロ船から逃げ回る。</p> <p>・マグロ船に捕まり、跳ねる。</p> <p>・筋肉の強さを見せるよういろいろなポーズをとる。</p> 	<p>・以前見た「マグロの一生」の映像を思い出し、卵から生まれ育ち、海を泳ぐマグロの力強さを感じるようにする。</p> <p>・マグロの体の筋肉の強さを表現できるよういろいろなポーズを一緒に考え、モデルを見せる。</p> <p>・「ゆらゆら～」と水の揺れを擬音で表し、感じられるようにする。</p> <p>・「かわいいマグロの赤ちゃんが生まれたね」と言葉かけをする。</p> <p>・「マグロ船がやってきた～」 「今日はマグロが大量だ！」とスリルを味わえるようにする。</p> <p>・「マグロは筋肉隆々です！」とより強さを意識できるよう言葉をかける。</p> <p>・マグロのいろいろな部分の筋肉を見せられるよう「背中」や「しっぽ」などと部位を意識するよう言葉かけをする。</p>

	<p>・「おいしそう」と言う。</p>
--	---------------------

表 2. 1 回目実践後のインタビュー記録 (抜粋)

<p>Q：環境づくりはどのように行ったか？</p> <p>A：朝、帰りの話し合いでもマグロの世界をイメージできるよ話し合った。マグロの映像も 5 歳児で見た。</p> <p>Q：子どもの表現のどこを認めようと思ったか？</p> <p>A：波は一人一人が体をくねらせて表現していたのでお腹をくねらせているところを褒めた。筋肉を見せるポーズは自分で考えたポーズやブリッジをして子どもがアピールしていたので認めるようにした。</p> <p>Q：次はどんなことに配慮したいと感じたか？</p> <p>A：保育者自身が楽しめていなかったので子どもと一緒に楽しみたい。子ども達は、コロナ禍の影響で身体表現遊びの経験が少ないため、5 歳児でも育っていない部分があると感じている。そこで、もっと身体表現遊びを行い、積み重ねていきたい。展開の仕方も考えていきたい。また、世界観を作る環境づくりの言葉かけも考えて、イメージが湧くようにしたい。</p>

表 3. 2 回目 劇遊び「ノラネコ軍団のおすし屋さん」の保育実践

子どもの活動と姿	保育者の援助・配慮
<p>○回転ずしのお店が開く</p> <p>・ペンギン、犬、ニワトリ、ミツバチ、カッパ、ブタがお客でやってくる。</p> <p>・回転寿司を表現して移動する。</p> <p>○ノラネコが這ったり、跳び上がったって登場する。</p>  	<p>・お面をつけ、それぞれの動物の特徴を捉えてなりきれるよう言葉かけをする。</p> <p>・セリフや歌は自信をもってできるよう待ち、励ます。</p> <p>・お寿司が回転する様子をどう表現するのか子どもから引き出す。</p> <p>・ノラネコの歩き方や動きの特徴を捉えて表現するよう言葉かけをする。</p> <p>・セリフの意味を考えて表現できるよう援助する。</p> <p>・考える時の表現を引き出すようにし、認めるようにする。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・お腹が空いたのでお寿司を食べたくなる。 ・どうやってお寿司を作るのか考える。 ・お寿司の作り方をこっそり忍び込み、見ている。 ・お寿司を握る表現をする。 ・足りなくなったマグロを探しに行き、マグロの水槽を倒してしまい見つかる。 ・みんなでお寿司を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・こっそり歩いたりのぞいたりする表現と一緒に考えて援助する。 ・倒してびっくりする気持ちを表現に繋げるよう言葉かけする。
--	---

表 4. 2 回目の実践後のインタビュー記録 (抜粋)

<p>Q：どんなことをねらいとして行ったか？</p> <p>A：子ども達が考え、工夫した表現を認めるようにした。いろいろな動物の動きを考え、ネコの動きも素早く舞台上に飛び乗ったり回転ずしの皿が回る様子を表現したりしていたが、セリフが入ることで表現に意識がいかなくなった。自信がないように感じたので、自信を持って表現できるようにしたい。</p> <p>Q：どんなところを引き出そうと援助したのか？</p> <p>A：セリフの言葉に合わせて身体で表現してほしいと思い、言葉かけをした。感情を表現するように意識した。</p> <p>Q：今後はどんなことを実践してみたいか？</p> <p>A：役ごとに表現して、お互いに見合い、話し合ったり認め合ったりしたいと思う。</p>

(1) 環境構成の考察

1 回目の実践においては、事前に、子ども達共通のイメージの世界を作るために、映像を見たり、壁にはマグロやマグロ船の写真を貼ったりしてマグロに興味を深まる環境構成(種まき)を行っている。朝や帰りの時間にもマグロの話をする話し合いの場を設けており、子どもの興味・関心を増幅していると予想する。さらに保育者は手作りの絵本を見せたイメージ想起を試みており、加えて海の中や活気あるマグロ船の漁をイメージする音楽を流すことで、より効果的に表現を引き出すことも意図していると捉えることができる。

3 学期に実施した 2 回目の実践(劇遊び)では、1 回目にしたように、2 学期に経験した運動会の「マグロ」の身体表現遊びから繋がり、その展開として保育者と子どもと一緒にテーマ選びを行っている。みんなで表現したマグロからお寿司という発想

へとつながり、子ども達の大好きな絵本を取り入れて構成している。この「マグロ」のテーマの連続性も子どもの興味・関心から子ども達の中に自然に存在しているモノやコトを構成し、実にスムーズに発展させていると推察する。身近な回転ずしがモチーフとなり、子ども達がお気に入りの「のらねこぐんだん おすしやさん」の絵本と結びつけることで保育者主導ではなく、子どもの興味の流れを捉えて環境づくりをしていると考察する。

(2) 援助の考察

1 回目の実践では、子どもがマグロの何を面白いと感じ、興味を持ったのかを子どもの様子から捉え、表現の展開に取り入れている。特にコロナ禍の中で育った 5 歳児であり、身体表現で培われる経験が不足していることに気づき、子どもと身体を使ってポーズを考える時に一定のモデルを示す援助を行っている。また、表 1 にあるように「マグロは筋肉隆々です！」や、お寿司になった子どもに対して「おいしそう！」という言葉かけは、子どもにイメージを想起しやすい言葉選びを行っているが、イメージを大切にしたい保育者の意図した言葉かけであると思われる。

しかし、2 回目の実践である劇遊びの過程では、モデルを示すのではなく、登場するネコのしぐさや回転する寿司をイメージした表現を子どもからアイデアを引き出し、認める援助を行っている。セリフを表現する動きも子どもの表現したものを褒めて他児に知らせている。表現自体の優劣ではなく、考えて表現することを認める援助であると推測する。しかし、インタビューでは、保育者自身が劇の流れを気にすることで、「自分自身が楽しめていなかった」とも振り返っており、保育者自身が子どもと一緒に楽しむべきであり、保育者として大切な援助であると感じていると推測する。また、インタビューにあるように「役ごとに表現してお互いに見合い、話し合ったり認め合ったりしたいと思う。」と、5 歳児なりにお互いを認め合う場を作る援助も積み重ねていくことが必要であると感じていると推察する。

2. 保育者 B(2 年目)の身体表現遊びの保育実践

- 1 回目：「新聞紙」(4 歳児) 10 月 27 日
- 2 回目：劇遊び「ポンタの自動販売機」
1 月 26 日

表5. 1回目の「新聞紙」の保育実践



子どもの活動と姿	保育者の援助・配慮
<p>○新聞紙と遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きく小さく揺らす。 ・上に投げる。 ・丸める。 ・広げる。 ・投げてキャッチする。 ・新聞紙に乗る。 <p>○身体で新聞紙を表現する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・横や縦に揺れる。 <p>・床に落ちる。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・伸ばす。 ・半分に折る。 ・紙飛行機になる。 ・丸める。  <ul style="list-style-type: none"> ・転がす。 ・破る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・揺れる音も意識できるような言葉かけをする。 ・子どもの発言を復唱して擬音で表す。 ・どこで受け止めるのか子どもの意見を聞き、取り入れて一緒に行う。 ・「ゆらゆら～」と新聞紙を持ってやって見せる。 ・「よいしょよいしょ」と手で伸ばす援助を行う。 ・ピンと伸びている子をほめる。 ・子どもの姿を見てほめる ・「また半分」と声をかけ次の動きの工夫を引き出す。 ・動きに変化のある言葉かけを意識して行う。 ・実際に新聞紙でやって見せる。 ・ぎゅぎゅとやって丸めて見せる。

表6. 1回目の実践後のインタビュー記録（抜粋）

<p>Q：環境づくりはどのように行ったか？</p> <p>A：冊子「かがくのとも」の「かみのおと」や「かみヒコーキ」を以前に何度か読んだ。新聞紙でも遊び、実際に新聞紙に触れて感じることも大切にされた。</p> <p>Q：どんなことをねらいとしたのか？</p> <p>A：表現するのが苦手な子もいるので思っていることを伝えられるようになってほしい。また、身体を思いきり使って表現する経験をしてほしいと思った。</p> <p>Q：子どもの表現のどこを認めようと思ったか？</p> <p>A：一人一人感じ方が違うので、その表現の違いを認めようと思った。ヒコーキの飛び方も初めは少しだが、2回目は遠くへ飛ばす子もいたので褒めたかった。</p>

表7. 2回目の劇遊び「ポンタの自動販売機」の保育実践



子どもの活動と姿	保育者の援助・配慮
<ul style="list-style-type: none"> ・場面ごとに先生と一緒にセリフを言ってみる。 <p>○先生と一緒にストーリーを確認しながら表現する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ぼんたやハムスター、こあら、たぬきの役になり、表現する。 ・自動販売機を作る様子を表現してみる。 ・自動販売機に入れたものが欲しいものになっちゃった喜びをどう表現するか考える。 ・先生の言葉を聞いて考える。 ・喜びを万歳したり、跳び上がったりにして表現する。  <ul style="list-style-type: none"> ・手を口の前にして、ハムスターになって歩く。 ・それぞれのポーズを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・場面ごとの気持ちを感ぜられるよう言葉かけをして感情を確認し、引き出す。 ・セリフと表現することが同時にできにくいので、じっくりと表現やポーズを考えるよう言葉かけをする。 ・「どうやって作ろうか？」「○○ちゃんどんどん作ってるね！」と他児を刺激するよう認める。 ・「どんな気持ち？」「ドキドキしてるかな？」「わくわくしてるかな？」と感情を引き出すように言葉かけする。 ・子どもが考えた表現やポーズを認め、他児にも知らせる。 ・子ども同士でも認め合えるよう一人一人に問いかける。 ・手の表現や歩き方を具体的に褒める。

表8. 2回目の実践後のインタビュー記録（抜粋）

<p>Q：どんなことをねらいとして劇遊びを行ったか？</p> <p>A：動物の気持ちも考えて表現してほしいと思った。また、動物になりきって楽しんでほしい。</p> <p>Q：劇遊びの過程（環境づくり）はどのように進めたか？</p> <p>A：以前から絵本を読んで、どんな動物になりたいか話をしながら身体表現遊びを行って楽しんだ。5回ほど行った。</p> <p>Q：どんなところを引き出そうと考えたのか？</p> <p>A：気持ちを表現できるよう子どもが感じることを大切にして、子ども達とやり取りをしながら、人と違う表現</p>

を認めるようにした。

Q：今後はどんな実践を行いたいのか？

A：ハムスターの表現やびっくりして喜ぶ場面の表現を子どもと一緒に考えて引き出していきたい。

(1)環境構成の考察

1回目は、紙の性質に興味を持つようねらいをもって絵本を用い、子どもが音に気付くことも環境構成に意識して取り入れていることが窺える。触れるだけでなく、音も感じる事がすべて表現につながっていくと捉えているのではないと思われる。新聞紙の形を変化させることで感じる質感の違いを身体で感じてほしい、内面で感じたことの表現であってほしいという保育者の願いがあるのではないかと推察する。触れた際の感覚が新鮮な間に、身体表現遊びへと繋げていると思われる。

しかし、2回目の劇遊びの過程では、感じたそのものの表現だけではなく、ストーリーの展開により、動物の気持ちが変化し、表現も変化していくことを予想して5回ほど動物の身体表現遊びを実践している。つまり積み重ねることで子どもの中にその時の感情が湧き、いろいろな表現に気づくことができるよう環境を作っていると推察する。絵本からすぐに劇遊びに繋げるのではなく、何度か動物になりきって身体表現遊びを楽しむことを重ねて環境づくりを行うことで、なりきる面白さや気持ちの変化による表現の工夫が引き出されていると思われる。

(2)援助の考察

1回目の「新聞紙」では、保育者の援助・配慮として、子どもの言葉に耳を傾け、工夫を見逃さないようにしようとする保育者の思いが窺える。インタビュー記録では、「ヒコーキの飛び方も初めは少しいたが、2回目は遠くへ飛ぶ子もいたので褒めたかった。」とあるように、子どもの感じた飛び方に違いのある感覚を大切に、常時、問いかけ、対話し、子ども一人一人の表現の工夫を認めようとする保育者の思いが窺われる。しかし、可能な限り、子どもの表現を認める援助を行いたい思いはあるが、すべて認めることができなかつたことを振り返っている。

また、2回目の実践（劇遊び）では、セリフのやり取りによって淡々と進めていくのではなく、表7にあるように「どんな気持ち？」「ドキドキしているかな？」「ワクワクしているかな？」と子ども自身が感じ、なりきって身体や言葉で表現することを重視して、子どもに投げかけ対話していると推察する。「子ども達とやり取りをしながら、人と違う表現を

認めるようにした。」とインタビュー記録にあるように、気持ちを表現できるよう子どもが感じることを大切に、応答的保育を行い、時には身体で子どもとやり取りしながら、環境構成としてできるだけ個々の表現を認め、自信に繋げることを試みようとしていると推測する。

3. 保育者C(3年目)の身体表現遊びの保育実践

1回目：「洗濯」(5歳児) 11月7日

2回目：「粘土」 2月20日

表9. 1回目の「洗濯」の保育実践




子ども活動と姿	保育者の援助・配慮
<ul style="list-style-type: none"> ○絵本「せんたくかあちゃん」の話をし、洗濯機の絵を見て話す。 ○洗濯物になる。 ・洗剤を入れてスイッチを入れると回りだす。  <ul style="list-style-type: none"> ・洗濯物が絡まる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・洗濯機や洗濯物になる面白さを思い起こす。 ・大きな動作でスイッチを入れてワクワク感を感じられるようにする。
 <ul style="list-style-type: none"> ・洗濯物が干される。 ・まだ絡まっていたが、ほどけて伸びる。 ・風に飛ばされ絡まる。 ・網にひっかかる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと一緒に絡まることを楽しむ。 ・洗濯物が絡まったのを「よいしょ」と言ってほどく。 ・「すごい！ぴんぴんに伸びてる」と褒める。
 <ul style="list-style-type: none"> ・何度も繰り返し楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「絡まる・ほどく」の動きや子どもとのやり取りを何度か楽しむ。 ・各々の表現を認める。



表10. 1回目の実践後のインタビュー記録（抜粋）

Q：環境づくりはどのように行ったか？

A：子どもが好きな「せんたくかあちゃん」を何度も

読んで、洗濯物の身体表現遊びを楽しんだ。園の洗濯機が回る様子を見た。
 Q：子どもの表現のどこを認めようと思ったか？
 A：洗濯物が絡まったり、風に飛ばされてひっかつかったりするところを面白いと感じているので、それを楽しめるようにした。絡まるところもいろいろな表現の姿があるので認めた。

表 11. 2 回目の「粘土」の保育実践

子どもの活動と姿	保育者の援助・配慮
○粘土で遊んだ時の話を する。	・粘土で遊んだ時の感触や 楽しさを思い起こすようにす る。
○「粘土になってまるくなれ ～」の先生の言葉で丸くな る。	・粘土の世界に入り込める 雰囲気を作る。
・「丸める」「四角にした」「伸 ばした」「指で跡作った」と 応える。	・「コネコネコネ」「コロコロ」 など擬音を使って伝え、表 現を引き出す。
・硬い粘土を表現する。	・いろいろな形に変化したこ とを思い出し、表現に繋げ る。
・先生の「カチカチ」の言葉 に反応し、じっと固まっている。	・粘土になった子どもの体 に触れ、「カチカチ」「柔らか くしよう」と言って硬さを確か め、こねる。
・二人で背中に乗り、くつつ く。	・「よいしょ」と言い、粘土を はがしたり伸ばしたりする援 助を行う。
・みんなでくつつく。	・子ども同士がくつつき合い 粘土が大きくなったりいろ んな形になったりするの を言葉にして認める。
	・友だちの表現に気づき、 一緒に表現できるよう言葉 かけする。
・へビのように長くなる。	・長くなった粘土の様子に びっくりして褒める。
	・長くなった粘土に触れ、長 さを確かめ、認める。

・ちぎれる。	・保育者も一緒になって粘 土になり、くつつくやちぎれ るという表現を楽しむ。
・丸まる。	
・粘土ケースに入れてしま う。	

表 12. 2 回目の実践後のインタビュー記録（抜粋）

Q：「粘土」の身体表現遊びのねらいは何か？
 A：いつも粘土遊びを楽しんでいるので、その様々な動
きで体を使ってなりきって表現してほしいと思った。
 Q：本日の保育を振り返って何を感じたか？
 A：一人一人やりたいものがあり、細かいところまで発
想力のある表現が見え、なりきっていたので、すべて褒
めたかったが、関わりきれなかった。もう少し友だちと
くつついて大きなものも表現したかったが、子どもに届
いていない部分もあった。
 Q：今後はどんな環境づくりが必要だと思うか？
 A：もっとやりたい思いが見えたので、導入の部分で十
分に動くことも取り入れると良かった。また、音を使っ
ても集中したかもしれない。効果音を活用しても良かつ
た。集中して言葉を聞くことができる環境づくりや援助
ができるよう、今後は、全体への言葉かけやタイミング
を考えて実践していきたい。

(1) 環境構成の考察

1 回目の「洗濯」は、「せんたくかあちゃん」の
絵本を読んだ感触から身体表現遊びに繋げ、何度も
楽しんだことが窺える。何度も身体表現遊びを楽し
んでいるため、表現すること、なりきって友だちと
関わることで、夢中になって遊ぶことができる環境
づくりを行っている。また、具体的に洗濯機の中を
見たり、洗濯物が干してある情景を見たりする体験
をしており、子どもが見て感じる場を保障している
と推察する。

また、2 回目の「粘土」は実際に触れ、日常で何
度も遊んでいる題材であり、子どもがとても興味を
持って楽しんでいることからイメージを呼び起こす
環境構成をしている。子どもが感性で捉えた粘土そ
のものの子どもの表現を受け止めることを重視して
いると思われる。

また、2 回目のインタビュー記録には、「もっと
やりたい思いが見えたので導入の部分で十分に動く
ことも取り入れると良かった。」や「音を使っても
集中したかもしれない。効果音を活用しても良かつ
た。集中して言葉を聞くことができる環境づくりや
援助ができるよう、今後は、全体への言葉かけやタ
イミングを考えて実践していきたい。」とあり、活

動を進めていく中でも子どものもっとやりたい意欲を感じ取り、援助したい思いが垣間見える。また、「一緒にする」面白さを感じるためには、効果音を活用することや、子どもが保育者の声を聞く環境づくりが必要であると感じていることが窺われる。これらは1回目の「洗濯」では意識していなかったことであり、5歳児には遊びを通しての一体感を感じて欲しいという願いの表れでもあると推測する。発達の過程を意図し、子どもが満足感を感じることでできる環境づくりの必要性や集団の中で育つことを意識する保育者の重要な資質の成長であると推察する。

(2) 援助の考察

1回目の「洗濯」では、展開の見通しを持ちながらも子どもがやってみたいという表現を認めていることが窺え、さらに、保育者主導で展開するのではなく、子どもが何を楽しんでいるのかを察知しようとする姿勢が認められる。子どもが、なりきって表現する中で、子ども同士や子どもと保育者の言葉や表現のキャッチボールを見逃さず、やり取りを楽しむことを重視している援助だと推察する。

2回目の「粘土」の表現では更に、遊びの中で粘土が様々に変化する様子を思い出すように保育者は意識して、「コネコネ」「まるくなれ〜」「あ、ちぎれちゃった」と言葉かけを工夫している様子が窺われる。師岡(2018)⁷⁾は、「保育者にとっても子どもと一緒に行動することで、子ども一人一人の心の動きや行動の意味がより深く理解できるはずです。」と述べており、保育者が、子どもと一緒に「洗濯」や「粘土」の世界に入り込むことで、子どもの思いや表現の工夫を理解していることが推察できる。しかし、一人一人の工夫は見えるが、それを受け止めきれなかったり、他児に伝えきれなかったりすることも感じており、環境構成と同じように援助でも全体への効果的で、意図的な言葉かけも必要であると感じていると推測できる。

師岡(2018)⁸⁾は、保育者の役割として「『理解者』とは、個と集団の両面から、子どもの状態、気持などをしっかりと把握することを求める役割です。」と述べており、5歳児であるがゆえに個と集団の相互性や関連性に気づいていて、保育者Cはそのための援助が必要であると感じていることが窺われる。

表現の幅を広げるためにも様々な粘土の可塑性を子どもに感じて表現して欲しいと考えたが、そのた

めには、表現のタイミングを見極めて言葉かけすることの必要性を感じていると推察する。これはテーマ独特の面白さから、個と集団の表現の違いの面白さや集団での一体感を感じて表現して欲しいという保育者の願いがあるからではないかと推測する。

IV. まとめと今後の課題

以上、保育者別にその環境構成と援助の特徴や変容を考察してきたが、3名の保育者ともに、保育者としての経験を2年、3年積み重ねる中で、園長をはじめとする先輩や同僚の先生方に支えられ、体験を生かし、学びのサイクルを踏まえて試行錯誤している姿を確認することができた。そして、クラスの子とも一緒に身体表現遊びを積み重ねていくことで、子どもの興味・関心に基づく環境構成や子どもの姿に合わせた援助などを身につけている過程が把握できた。環境構成では、「環境を通しての保育」が常に遊びの過程として計画され、身体表現遊びに向けての導入がなされていることが明らかになった。それは、対象とした保育者の、日々の保育が繋がっていることや子どもの興味や関心を捉えようとする姿勢を示唆しているものと考えられる。

高山(2021)⁹⁾は、「環境の質、遊びの質によって、子どもが身につける学びのスキルが変わります。子どもが『ひと・もの・こと』とじっくり関わりをもつことによってこれらの学びのスキルは身につきます。」と学びのスキルにつながる環境構成の重要性を述べている。今回の保育では、子どもに寄り添った題材選択をし、子どもと共に、オリジナリティあふれる世界が表現されていた。その背景に、保育者が意図的にねらいを絡めて環境を構成し、子どもの興味・関心を育む「種まき」がされていることが確認できた。種まきにより夢中になって遊ぶ場を保障しつつ、「一緒にする」空間を活かし、子どもの考える力や工夫する力を引き出す援助を意識していると考えられる。

汐見(2018)¹⁰⁾は、「保育者としての適切性や優秀性ということの中身には、子どもを私の保育の手段ではなく、目的として感じながら、その子どもの人間的な成長に適切に関わり貢献するために必要な知識やスキルを豊かに持っている、ということが必ず含まれています。」と述べており、このことは認知できる表面的な姿ではなく、子どもの心を豊かにする非認知能力を育てるといった専門的な目的意識が大切

であることを示唆していると考え。つまり、今回の保育者も、現れた表現の形のみを保育の評価とするのではなく、子どもの内面に変化や成長を与える保育が大切であるという考えに基づき、援助を行っていることが推測できる。

さらに、室田(2018)¹¹⁾は、「豊かな保育は、様々な子どもの感情を受け止め、その感情に左右されながらも、こちらの思いも伝えていくことから始まるのだと思います。そのような保育者のありようが、子どもの心を育てます。」と述べている。対象とした保育者は、身体表現遊びで、子どもと保育者の思いのキャッチボールや共創などの応答的保育をしていたが、その対応を通して子どもの心を育もうとしていたと読み取ることができる。しかも、5歳児を担当している保育者Aや保育者Cのインタビュー記録にあるように、そこには個と集団による子ども相互の育ち合いの場を意識する保育者の目的意識も絡んでいくと思われ、この援助の姿勢は、重要な保育者の資質であると考え。

さらに、子どもの学びを支える、これらの保育者の応答的な関わりは、「保育者は、主体的な子どもの学びを支えるために、環境を構成し、状況のなかで、子どもと対話をします。環境との三項関係の学びを支えることが保育者の役割になります。」と高山(2022)¹²⁾が述べているように、身体表現遊びの実践においても、「子ども」と「保育者」と「環境(もの・ひと・こと)」という三つの項目が互いに環境構成や援助を通して連鎖し、保育者の意図を絡めながら対話を重ねることで、子どもの学びを支えていることが明示されている。この学びを支える保育者の対話力が大切な保育者の資質・能力の一つであると考えられる。そこで重要なのは、今回の保育者による対話は、言葉のみではなく、身体を通して行われ、応答している点である。すなわち、身体を通して子どもと対話することが大切であると、3名の保育者は身体表現遊びを通して感じていることが推測できる。身体を通して子どもと関わる能力は、保育者としての専門的な資質であると位置づけることができると思われる。

室田(2018)¹³⁾は、さらに「保育者の提案に対して、一人一人の子どもがどのように取り組もうとするのか、そこには子どものどのような気持ちが働いているのか、その気持ちやふるまいはどのように変化したか、そうした過程が保育です。」と述べている。3名の保育者がすべて子どもと呼应しながら遊びを進

めていることは、子どもへ投げかけることがすべて子どもを育てる保育であり、大切な過程であると感じていることが窺える。

身体表現遊びの特徴である身体を通しての対話は、「目だけで子どもの外側から表面的に見るのではなく、自分のからだを通すことによって、子どもの『そこ』と自分の『ここ』が重なると、子どものこころの揺らぎが感じられ、自然と気持ちが伝わってくるのです。」と本山(2018)¹⁴⁾は述べており、保育者Aと保育者Cの実践では身体を通してのコミュニケーションの意味を保育者自身が感じて保育していることが推測できる。一方、保育者Bも同様に感じているが、身体よりも言葉での援助が幾分多く、これは身体表現遊びの積み重ねの経験年数の違いによるものであらうと考えられる。

このように保育者が身体を通して子どもと遊び、対話することは、子どもとのやりとりの中で瞬間的に判断して子どもの育ちにつながる援助を考えることができる保育者の資質の育ちに繋がっていると推察できる。

また、岡本(2018)¹⁵⁾は、「保育者は『自分ができる』だけでは不十分で、子どもと表現と創造をやりとりする技術が必要なのです。そしてそれは、遊びの一員として、子どもと共に楽しむことの積み重ねによって習熟していく業なかもしれません。」と述べている。今回の保育者も子どもと一緒に楽しみたいと願い、保育者が遊びの一員として子どもとともに楽しんでいる。この積み重ねによって、環境構成力や援助する力は、より一層、身につけ、保育者の資質や技術が培われていくことが期待できる。

つまり、今回対象とした3名の保育者は、子ども一人一人の感じ方を大切にして、表現を認める姿勢をベースとし、子どもから引き出すための援助や子どもに気づかせるための言葉かけを工夫する努力を行っている。子どもとの対話や、やりとりを通して援助のタイミングを見極め、遊びの流れを体感する中で、援助する力を身に付けている過程を把握すると共に、子どもとの思いや表現のキャッチボールを楽しむ保育者の姿勢やこころもちの必要性を垣間見ることができたと思われる。また、保育者自身が実践する中で感じた、子どもの感情や表現を引き出す対話力や子どもへ伝達していく力の獲得が、今後の課題として挙げられる。これは、日常においてどんな体験や生活を保育者が創り出すのかにも関連して考えると考えられる。

しかし、子どもの状況を鑑みる時、現在でも実際に見て触れ、体験する機会が減り、バーチャルな世界で遊ぶが増える中で、イメージする力も弱まってきている。子どもの実体験の希薄さが様々な面で問題として浮かび上がってきている。西(2009)¹⁰⁾は、「これからの表現の援助者は、子どもがどんな世界と出会い、どのようにつながろうとしているのかを敏感に感じとらなければならないと思うのです。そして実際の表現の援助以前に、表現の土壌となる子どもの内面そのものを耕すことに、これまで以上に心を配る必要が生じてきたのです。」と述べ、身体を通して子どもと関わり、対話し、遊びの世界を共有して、共創することのできる保育者のスキルの必要性が大きくなっていることを明言している。日常のどんな遊びにおいてもこの保育者の姿勢や心構えは重要であると思われる。

したがって、保育者が、子どもの感性を刺激し、興味や関心を引き起こす環境を構成し、展開していく保育実践である身体表現遊びの重要性を改めて確認することができた。また、今後、保育者が身につけていくべきスキルとして、身体を通して子どもと関わり、学びへと導くために援助する力が求められていくであろうと推察する。この能力は、日常の遊びを通して子どもの内面そのものを耕すことのできる保育者の資質・能力にも通じていくと推察する。

今後も身体で子どもと関わる遊びを実践していくために必要な資質・能力を身につけることのできる身体表現遊びの実践を援助していきたい。また、子どもと遊びの世界を共有することを楽しみ、その上に、子どもの思いや表現を引き出して、育ちを大切にしようとする保育者の思いや実践に寄り添っていききたいと考える。

研究分担

研究の組み立ておよび論文の構成を本山が担当した。実践記録・インタビュー記録の抽出及び論文の執筆は小原が担当した。

謝辞

研究の趣旨をご理解いただき、ご協力いただいた園の園長先生と保育者の方々には心より感謝申し上げます。

引用文献

1) 小原幹代(2021)「身体表現遊びを積み重ねることの意味」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』(54)、pp. 19-28

- 2) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』(平成 29 年告示)、フレーベル館 pp. 248-249
- 3) 同上 p. 251
- 4) 同上 p. 252
- 5) 同上 p. 253
- 6) 小原幹代(2022)「主体的・対話的で深い学びへのアプローチ—身体表現遊びを通して—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』(56)、pp. 1-9
- 7) 師岡章(2018)『新しい保育講座②保育者論』ミネルヴァ書房、p. 75
- 8) 同上 p. 74
- 9) 高山静子(2021)『改訂保育者の関わり方の理論と実践』郁洋舎、p. 62
- 10) 汐見稔幸(2018)『新しい保育講座②保育者論』ミネルヴァ書房、p. 1
- 11) 室田一樹(2018)同上 p. 56
- 12) 高山静子(2021)『改訂保育者の関わり方の理論と実践』郁洋舎、p. 63
- 13) 室田一樹(2018)『新しい保育講座②保育者論』ミネルヴァ書房、p. 60
- 14) 本山益子(2018)『からだからはじまる保育のアート』市村出版、p. 12
- 15) 岡本雅子(2018)『からだからはじまる保育のアート』市村出版、p. 14
- 16) 西洋子(2009)『子どもの身体表現～からだところ・あらわしてあそぼう～』市村出版、p. 2

参考文献

- (1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』(平成 29 年告示)、フレーベル館、pp. 45-49
- (2) 同上 pp. 116-118